

この辺の機微に通じておられましたマダムは、ですからまず御主人に惚れる事を中止されました。つまり御主人にどのように親切にされてもポーツとならず、ドンナに御機嫌を取られてもスツカリ嬉しがない稽古をされました。これはマダムにとっては最も困難なお稽古と考えられておりましたが、それでもとうとう一生懸命で成功されました。いつもスマアして、ニコニコした、しなやかな心で御主人を迎えられるようになりました。

ところでマダムの御主人は、いつも夕方の五時ごろ（それは御主人のリファインされたアタマで撰定された、最も適当と認められる時間）にお帰りになるのでしたが、出迎えられたマダムは、いつも待合の仲居か、ホテルのボーイのように無感激に……しかも上品にスラスラと御主人の身のまわりのお世話をされました。そうして御主人からのお尋ねがなにかぎり、クダクダしい家事向きの事などはコレンバカリも話されずに、やはりニコニコしながら夕飯の御膳にさし向われるのでした。

その間にはタツタ一つの技巧しかありませんでした。

……スマアしてニコニコしている……という無技巧の技巧……

マダムはうしろ暗いところがないだけに、この無技巧の技巧を、御主人よりもイクラか楽にとめられるのでした。

しかもそこが又タツタ一つのマダムのつけ目なのでした。

御主人はもとより、心にうしろ暗いところのある時に限って、特別に御自身一流の無技巧の技巧を装うてお帰りになるのでした。それでもマダムの無技巧の技巧に対しては、いつもチョツトの違いで勝ち目を譲られるのでした。

……ハテナ……感付いているのかしらん……いないのかしらん……

と考えられるだけでも御主人は著しい引け目を感じられるのでした。そうして、その引け目を蔽いかくすべく、御主人は色々な技巧を弄ろうされるのでした。弄すれば弄するほど技巧が技巧らしく見え透すいて来そうになる事を、御主人はオツムがクリヤなだけそれだけクリヤに感じられるのでした。しかも御主人としては、それを是非とも蔽いかくさねばならぬ立場になっておられるだけ、それだけにイヨイヨ技巧の破綻をあらわされることになったのでした。

……時々、他家よそへ行つたような気持ちになつて、鼻の頭を撫でたくなつたり……

……妙なところで咳払いが出かかったり……

……留守中の出来事を尋ねられる言葉づかいや声の調子が、どうしてもわざとらしい切り口上になりかけたり……

……マダムの話をきかれる態度や、相槌の打ち方が、いつもよりもすこし熱心過ぎたり
 ……

……お茶碗を差し出しながら、思わず態度を勿体ぶったり……

……「ああ美味おいしかった」という言葉のおしまいがけが、いつもよりも心もち感傷的に響いたり……ETC……ETC……

マダムは、しかしそれでも、やっぱりスマアして、ニコニコしておられるのでした。それでいてこうした御主人の心理的な変化を、極めて隅々のデリケートなところまで見逃がさずに見て取られるのでした。そうして、その冷静な、すきとおった判断にかけて、イヨイヨ間違いないと思われると、やっぱりスマアしてニコニコしたままお膳を下げて、お湯に這はい入られるのでした。

マダムの湯上りのお化粧は、そんな晩に限って特別に濃厚に、一種の暗示的な技巧を凝こらして仕上げられるのでした。そうして御主人に内証で買われたスバラシク派手な着物とか、帯とか、上等の装身具などの中うちの一つか二つかをこれ見よがしに身に着けて、やはり無技巧の技巧を冴えかえらせながら、無言のまま、ニコニコと御主人の前に出て、美味しいお茶を入れられるのでした。実は泣きたいような御主人の笑い顔をホノボノと見返さ

れるのでした。そうして疲れておられる御主人を、もう決してほかの女とは遊ばないと決心させるほど……それほど徹底的にニコニコ責めに責め上げられるのでした。

こうした技巧を凡そ四五遍もくり返して行かれるうちに、マダムはどうとうその御主人を完全に征服してしまわれました。無技巧の愛を百パーセントに占領されることになりました。

けれどもその御主人は、それから二三年経つうちに神経衰弱にかかって世を早められましたので、マダムは賢夫人の名の下に沢山の財産を受け嗣がれる事になりました。

マダムはこのごろ、こんな事を考えられるようになりました。

「妾わたしのせいじゃなかったか知らん。男つてもものは時々他所よそへ泊らせないと、いけないものかも知れない」……と……。



ある処に一人のフラウがありました。

その御主人は有名な遊び屋で、お二人のアパートに帰られる事は三日に一度ぐらいしかないのですが、それでいてお二人の間はトテモ、シツクリとした甘ったるいものでした。否、むしろフラウの方がオツカナ、ビツクリ仕掛けで、御主人の機嫌を取り取り送り迎えをしておられるように見えました。

この事はむろんこのアパートの七不思議の一つに数えられているのですが、或る時、お隣りのミセスがチョットしたものを借りに来た序ついでに、さり気なくこのことを尋ねてみますと、フラウはみるみる首のつけねまで真赤になりながら、うつ向き勝ちにこう答えられるのでした。

「主人はわたくし達の結婚式の晩から、もうどこかへ消え失せて行くのでした。そうして帰つて来た時はいつでも二日酔いをして、妾に介抱ばかりさせるのでした。

妾はこうした主人の大ビラな仕打ちに対して長いあいだ何事も申しませんでした。妾は主人よりほかに男の方を存じませんでしたので、もしかしたら妾がわるいのじゃないかしらんと思つて、心をつくして仕えました。それでも、どうしても主人の他所よそ泊りが止みませんでした。

そのうちに妾のそうしたウツプンが、とうとう破裂する時が来ました。妾はその時にキ

チガイのように喋舌りつづけました。洪水のように涙を流しながら、今までの主人の横暴を一々数え上げて行きましたが、そのうちにとうとう口が利けなくなって、ベッドの上に突伏しますと、それまで黙って聞いておりました主人は、やがてタツタ一こと申しました。

「お前の云い分はそれだけか」

妾は口の中で「ハイ」と答えながら涙の顔を上げました。すると主人はその妾の横頬をイキナリ眼も眩むほどハタキつけました。

……スパ——ン……と……。

そうしてそのまんま、どこかへ泊りに行きました。

妾は、それからというもののホントウに無条件で、身も心も主人に捧げるようになりました。

……ホントウニ男らしい……」

フラウの眼に、涙が一パイに浮き上りました。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：江村秀之

2000年7月4日公開

2006年3月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

奥様探偵術

夢野久作

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>